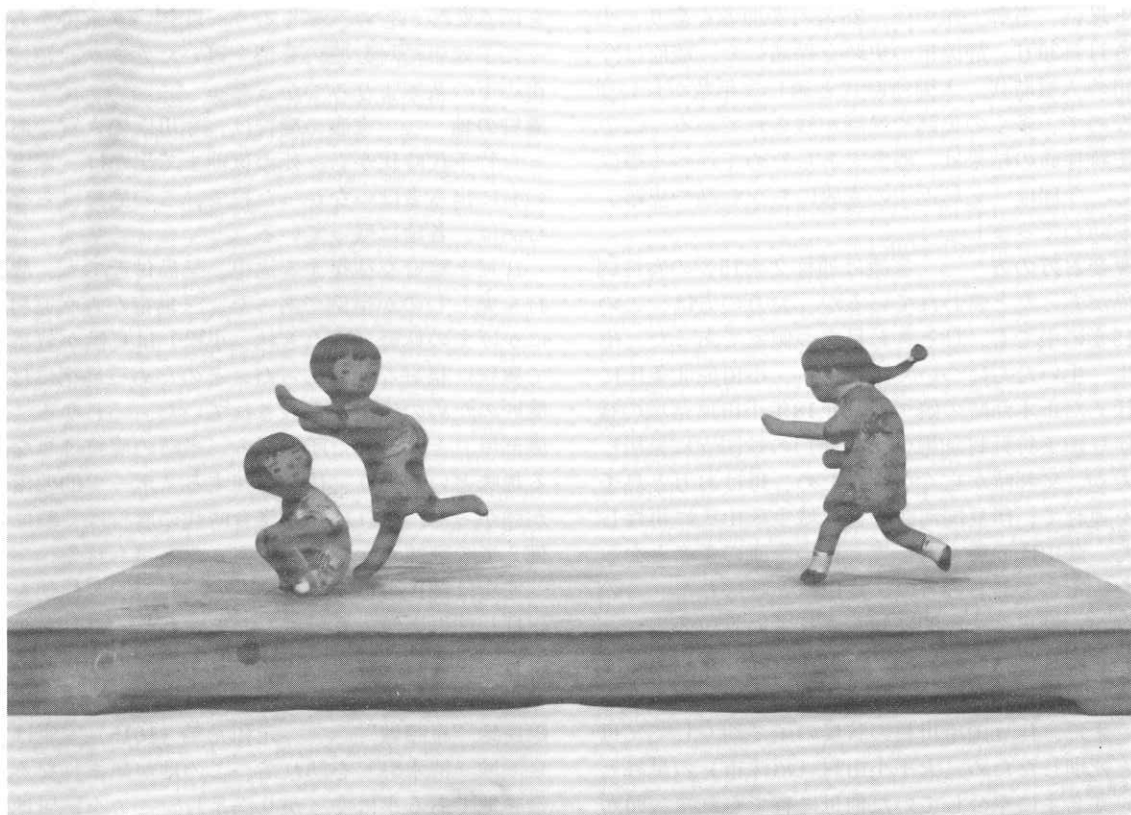


郷 土 館 だ よ り

Vo 1. V No. 2

1983. 1. 1



かげふみ (三四呂人形 野口三四郎作)

目 次

歴史探訪「徳川家康を訪ねて—三島周辺」	1
切支丹B・フェルナンデスの故郷を訪ねて	2
テーマ展「山本玄峰老師展」報告	3・4
行事報告	5
展示資料紹介・収集資料紹介	6
三島古文書読習会の生い立ち・おしらせ	7

歴史探訪

「徳川家康を訪ねて——三島周辺」

今春、NHK大河ドラマで徳川家康を放送することが決まり、書店の本棚には、家康に関連する本が目だつようになってきた。ドラマの舞台になる岡崎、浜松、静岡市では、放送のための資料準備や撮影協力、観光客対策に大忙がしのようである。ドラマが開始されると、多くの観光客が押し寄せて、じっくり史跡見学ができなくなるだろうと思い、当郷土館では、25名の参加者を募り、去る11月30日、静岡市の史跡を探訪した。駿府は今川の人質時代、大御所時代と過した年数が長い所なので、多くの史跡や逸話が残されている。この史跡探訪の結果は、機会をあらためて述べる事にし、今回は「三島近辺の家康にちなむ話や史跡」を訪ねてみましょう。

愛妾お万の方 家康は通称2妻15妾の女性関係があったと言われているが、お万の方は、この15妾の中でも、ひとときわ目立つ側室であった。出生、生いたちについて諸説あり、小田原北条氏に仕えた正木邦時の娘で、天正18年小田原落城の後、伊豆国下狩野村加殿(修善寺町)の妙国寺に蟄居したが、父邦時が亡くなったため、母はお万と息子を連れて、伊豆国河津の笹原城主蔭山氏に再嫁した。蔭山氏の養女として、後に家康の愛妾となった。そこでお万の方は、蔭山殿と呼ばれた。この説が、歴史上一般的に知らされている……

徳倉の貧乏百姓の娘で、三島の本陣で女中をしていたところ、家康に見染められたという説もある。

また、伊豆国冷川村の貧農の子で幼くして父母と死別したため、大平小山村(沼津市)の星谷という名主に奉公していた伯母に育てられた。頭が良く、大変な美人であったため、家康の接待役として、三島の本陣に召されたところ、お目にかかない側室となったという説がある。側室となった蔭山殿は、家康から大変な寵愛を受け、慶長7年に頼宣(紀伊)、8年頼房(水戸)を年子で生んだ。時に家康60才であった。家康はこの二人(10男頼宣、11男頼房)が晩年の子供であったため、一身に愛情を注いだ、そして後の御三家となった。これに対し、お万の方への愛情は急速に冷めていった。お万の方は郷里の伊豆へ戻り、古奈や修善寺の温泉に入ったり、日蓮宗に対して信仰が厚く、日産上人と親族関係であったため、修善寺加殿の寺や、玉沢の妙法華寺に、よく参詣された。日産

上人は、妙法華寺は日産上人の後継者日達上人が、二代將軍秀忠から朱印地を受け当時大木沢と言っていたこの地を玉沢と改め、お寺を移された。お万の方は、この妙法華寺に仏像や器物を寄進した、現在 その一部が同寺宝物館に所蔵されている。又、お手植の松や梅の木が境内にある。当時のお万の方は、先にも述べたが、日蓮宗に帰依したり、故郷でのんびりした生活を送ってはいたが、その心の片隅で、家康に寵愛を受けていた当時に深くつかしみ、夢をもう一度という気持があって、家康に対しての愛情を書いた恋文が、沼津市志下の某家よりみつかった。

鷹狩の地 家康の鷹狩は、今川氏の人質であった竹千代時代から、死ぬ直前まで出かけ、家康の右に出る者はいなかった程で、この鷹狩にちなむ話は、各地に残っている。

江戸と駿府を往復する途中、三島付近でも、鷹狩を楽しむのが恒例であった。三島宿から幸原村にかけての林野(くぬぎ林、小松)は鳥獣が豊富で鷹狩に格好な地であった。そのため三島宿には鷹匠のための住宅が常設されていた、いわゆる「鷹部屋」といわれた所である。当時の鷹狩は単なる趣味というより、体を鍛練するスポーツの要素が強かった。これに対し鎌倉時代の鷹狩は、戦に備えての訓練が主な目的であったと言われる。

家康は源氏の血をひき(家系を買った)源頼朝を崇拜し、「吾妻鏡」を愛読したと言われ、これらの影響が、鷹狩を一生の趣味とした原因の一つであったと思われる。

隠居地“泉頭城” 元和元年(1615)家康は泉頭城(清水町)を訪れて、この地が類まれなる景勝地である事にすっかり満足し、ここを隠居地とし、駿府を頼宣に与えようと考え、部下にその旨を命じた。

その嶽始めの段どりまで決定していたのが、急に駿府を退隠地にと変更された。この原因について諸説あるが、泉頭辺は、田舎の何もない所で、大変不便な土地であった為、奥女中がこぞって反対したことによると言われる。また一説には、府中屋敷に清泉が湧出したため、わざわざ、そんな場所に隠居所を作らなくてもといわれる。ちなみに、この泉頭城西側には、柿田川という東洋一(日量130万トン)の湧水池がある。駿府の安倍川は当時八ツ手のような形で駿府城下を四方八方に水が流れ、この伏流水が、あちこちに湧水していたと言われる。又大雨の度に供水を起した為、家康

は安倍川の堤を築いたという記録が残っている。

話しは元に戻るが、もし、この泉頭に隠居所が建っていたら、三島・清水町はどんな風になっていただろうか……

だが、この隠居所築造は、翌元和二年に家康が75才の生涯を閉じている為、工事中途となり、完成までこぎつけるのは、難かしかっただろう。

(館長 梅田貞治)

切支丹 B・フェルナンデスの故郷を訪ねて

この夏、機会を得て、ポルトガルへ行くことができた。旅行には一つの目的があった。切支丹 B・フェルナンデス師の故郷を訪ね、師が滞日中に故国へ書き送った書簡を探し出すことである。三島から東京のイエズス会に、東京からリスボンのイエズス会にと、旅行前に出来る限りの連絡をとっておいた。と言うのは、目的だけは立派に用意したものの、果して史料が実在するのか否か、旨い具合に事が運ぶかどうか、先のことは全く見当がつかない状況だったので少しでもルートを開いて置く必要があったからだ。

B・フェルナンデスは1562年ポルトガルのボルバに生れた。コインブラで勉学を修め、司祭となって東洋へ布教に来ることを志した。フランシスコ・ザビエル渡来後半世紀を経た時代で、イエズス会の、東洋の国々におけるキリスト教宣教活動が、順調な軌道に乗っている頃であった。

数多くのヨーロッパ(ポルトガル、スペイン)の若者達が司祭となり、東洋を始め、世界中の国々へ宣教の旅に出た時代である。未知なる世界に対する憧れと同時に若者達の冒険心もあったからであろう。こうしてB・フェルナンデスも、はるばる日本までやって来た。ところが当時の日本の状況は、ザビエル渡来の頃とは異なっていた。すでに迫害の暗雲が日本キリシタン達の上を覆い、特に新たに渡来した伴天連(司祭)にとっては極めて苛酷な状況が待っていた。師の足蹟は、ローマのイエズス会史料中に、いくつか記録されている。当三島地方については「駿河から伊豆に入り、そこに居た数十名のキリシタン達の告解を聴いた……」とある。師はこれ以後更に関東地方を回り、長崎へ帰っている。最期は壮烈だった。長崎で、1633年10月3日に、肉体を切り裂かれ火に焼かれて亡くなっている。

B・フェルナンデス師の故郷の町ボルバは、ス

ペイン国境に近い小さな田舎町である。なだらかなコルクの林が続く平原の中に、ポツンと孤立したように町があった。人口は約一万八千人位であろうか。町の人に聞いても、ある人は八千人位と言ひ、別な人は一万一千人だと言う。町の中央には広場を挟んで何軒かのカフェがある。老人達はこの広場やカフェで、一日中立ったままお喋りに興じている。若者達は近くの町エボラやボルバ近郊の大大理石切り出し現場に働きに出て行った。

町の風景といい、のんびりしたムードといい、まるで数百年の時間が止ってしまったかのような感覚にとらわれる。この小さなボルバに教会が、大きなもので二カ所、小さな礼拝所も含めると数カ所もある。まさにカトリックの国である。B・フェルナンデス師の出身教会は、町外れの古い教会であった。ここで何とか1500年代の洗礼台帳を拝見したいものだと思い、主任司祭に尋ねたが「もう保存してない」との返事だった。洗礼台帳は、日本の戸籍台帳とも言えるもので、昔を知る唯一の手掛りであるのだが、残念でもあきらめざるを得ない。

目的の書簡は、エボラで見つかった。エボラはボルバに近く、ボルバよりは大きい都市である。ここの図書館に保管されていたのだ。それはB・フェルナンデスの紛れもない肉筆の文書であり、一綴りに整理されていた。内容はポルトガル語で書かれた日本キリシタンの殉教録である。

文章中に、日本名の「何々右エ門」という文字が読めた。こうして、このコピーを手に入れることができ、帰国した。近い将来、この殉教録を解説することにより、日本のキリシタン史の一頁を形成することができたら幸いである。(杉村 育)



B・フェルナンデス師の出身教会(ボルバ)

テーマ展

「山本玄峰老師展」報告

去る10月8日から2ヵ月の間、郷土館一階展示場で催された「山本玄峰老師展」は、好評のうちに終了した。

期間 10月8日～11月30日(延べ54日間)

会場 郷土館 一階 展示室・会議室

展示数 前期10月8日～11月9日 67点

後期11月10日～11月30日 60点

*主な展示品

遺墨「玄峰塔」・「光禪」・「寿」
(寄せ書き)・「道」・「松竹梅」他

屏風「東海天」・「月の中にて住む心地して」・「大乘十來」他

遺物「般若会賽銭箱」・「白隠禪師伝来の払子」・「一心茶碗」他

入館者数 15,943人

1. 開会式

日時 10月8日(金) 午前10時～11時

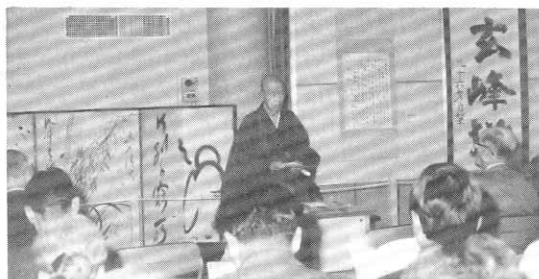
式次第

- | | |
|-----------|-------------------------------------|
| (1)あいさつ | 三島市長 |
| (2)来賓祝辞 | 中川宋淵老師(竜沢寺)
橋本市議会議長 |
| (3)テープカット | 中川宋淵老師
三島市長
伊東教育長 |
| (4)展示資料案内 | 郷土館学芸員 |
| 出席者 | 三島市長、市議会議長
作品出品者、報道関係者
等 約40名 |

あいにくの台風くずれの雨の開会式だったが、玄峰老師の熱心な信者の方々、出品者の皆さん、社会教育関係者などが集まり、老師最後の書「玄峰塔」の前で式典が始まった。祝辞で老師の遺徳が称えられる中で、特に宋淵老師の遺墨展に対する的を得たご批判が印象に残りました。続いてのテープカットでは、玄峰老師を讃じた今様「熊野の奥に生ひ出て、筏流しや木の根掘り、盲目となりしが縁にて、まことの**目明**となりにけり」が中川宋淵老師によって謡われた。

次に引導が渡され、老師の郷土館中に鳴り響く大喝と共に紅白のテープにハサミが入られた。参列者はその間合掌のまま、遺墨展の成功を祈っ

た。日本有数の禅僧である玄峰老師の遺墨展ということで、通常の郷土館特別展開会式とは違う、宗教的雰囲気包まれ、大変荘厳で気合の入った開会式であった。



開会式にて祝辞を述べる宋淵老師

2. 山本玄峰老師展記念講演会

日時 第一回 11月6日(土) 13:00～14:00

第二回 11月14日(日) 11:00～12:00

会場 郷土館 第一会議室(第二展示場)

講師 竜沢寺 住職 鈴木宗忠老師

出席者 第一回 38人

第二回 43人

会場の広さの関係で、入場者を予約定員制にしたが、募集からわずか一週間で定員に達し、ひきもきらない申し込みの電話をお断りするのが一苦勞であった。入場を希望されて果たせなかった方々には、この紙面を貸りておわび申し上げます。

玄峰老師を直接ご存知で、老師を慕って申し込まれた方、高名な鈴木宗忠老師の話聞く事を希望される方、禅宗に興味を持っている方など、参加動機は様々ながら、皆熱心であった。中学生から高齢の方まで、受講者の年齢層が幅広かったのもこの講演会の一つの特色であった。狭い部屋にぎゅうぎゅうに詰め込まれ、むし暑く、息苦しい場内では、誰一人身じろぎもせず宗忠老師の話に聞き入っていた。

*講演内容(抜粋)

「死んでからだぞ。死んでからだぞ。70よりは80、80よりは90、90よりは死んでからだぞ」と玄峰老師はしょつ中言っておられました。その言葉が現在こうして生きているわけです。

書家の字はきれいですが、字が死んでいる。ところが玄峰老師の字は大きく見える。老師は息を止めて書かれた。止める事は死ぬ事、一つもわだかまりがないから、水が流れるように自分の心を紙に写された。老師は本当の心の世界を字を通して説法なされた。その時に一番必要だという言葉を書かれておりました。一つ一つの書が、その時

代時代に応じて説法しておられます。その字から流れてくるエネルギーをいただいて下さい。

3. 遺墨展 展示場風景

会期中、私共職員は、展示場でお客様と接し、案内すると同時に対話を心掛けた。この中で、お客様から教えていただく事が大変多かった。

老師96歳の絶筆「玄峰塔」の前で30分以上もじっと佇む方が何人もいた。96年間の全エネルギーを込めて書かれた迫力が、人々を引き付けて止まないのか、あるいは書の中の老師と語り合っていたのか。「玄峰塔」の前に立つ人は老師の世界に引き込まれ、私共は声を掛けられなかった。

「この方は目がお見えにならないでこんなに書を書けたのですか。事務室に中年の紳士が聞きにみえた時もあった。完全な失明ではないがたいそう目が不自由であった事、厳しい修業により心眼を開かれた事など説明すると、

「実は、私もほとんど失明に近い状態なのです。たまたま、郷土館に来て、えらいお坊さんがいるなあとと思いながら年譜を見たら、『失明の宣告を受けた』とあるじゃないですか。びっくりしました。これは私もうかうかしてられないと思いました。玄峰さんに負けんよう、これから頑張ります。」明るい顔で、その方は帰っていった。楽寿園の中にあるという立地条件により、当然の事ながら、観光客や、他の楽寿園の催事物見学のついでに見える入館者が圧倒的に多い。玄峰老師を知らない人々が、この遺墨展に関心を持ってくれるだろうか。遺墨やわずかの解説から玄峰老師の偉大さ徳を汲み取ってもらえるだろうか。およそ墨蹟の展示には不向きな貧弱な展示場、不十分な照明の中で、遺墨を観賞できるであろうか。そのような私達の危具は、みごとにはね飛ばされた。

「すばらしい書ですね。どんな方が書かれたのですか。」

「本当に目が見えなかったのですか。」

「とっても90歳すぎの書とは思えん。すごいエネルギーだ。」

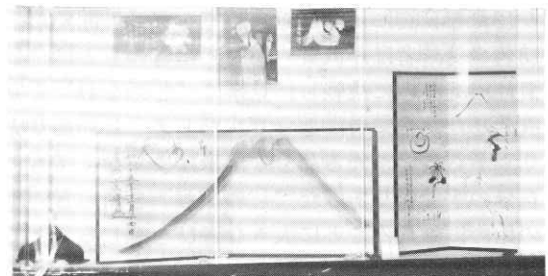
展示場に座っていると、質問され、案内すると、感嘆の声が湧く。老師の書の魂力に、新たに多くの人々が引きつけられたようである。

もちろん、生前の老師と交渉のあった方は、なつかしい思いに捕われた人が多かったようである。ことに、昭和28年米寿のお祝いの際書かれた「寿」(寄せ書き)の署名の中から自分の名、あるいは知人の名を捜す人の姿が、数多くみられた。声をか

けると、なつかしように、老師の思い出を語って下さり、死後21年後の今でも、老師の影響の大きさを感ぜずにはいられなかった。

遺墨の中に、宗舜禅師と玄峰老師の合筆に依る勤忍袋の図がある。老師の片腕となって、龍沢寺復興にあたり、「宗舜和尚ありての玄峰老師」とまで言われながら戦後すぐに亡くなられた。すでに知る人も少なくなってしまうけれども、当時を知る人々は、この書に大変感激されていた。

展示場で記帳していただいた芳名録には、地元三島と共に東京、神奈川の方が多い。話を伺うとわざわざ玄峰展のためにきたという。兵庫、和歌山など、遠方からおいでになった人が多いのは、老師の徳が全国に広がっていた証拠であろうか。



展示場風景

4. 反省とおわりに

一地方博物館である郷土館は、予算その他の面で制約が多い。残念ながら、ポスター等を作製する事が出来ず、広報活動も市の広報及び、新聞等に取り上げてもらうのを期待するのみであった。楽寿園入園者のわずか3パーセントが「山本玄峰展」を知るのみという現実、私共の広報活動の至らなさを示すものであった。一方では、口コミによって神奈川・東京から多くの人々がわざわざ来館している。今回の成功が、老師に縁のある人々に負う事が大きいと思う。

郷土館での墨蹟の展示は初めてであるため、不慣れで、展示において至らない点が数多くあった。幸い、中川宋淵老師と下田舜堂先生にご指導いただき、展示場の体裁を整えることができた。両氏に厚くお礼申し上げます。

今回の山本玄峰老師展開催にあたり、竜沢寺・松陰寺を始めとする、三島・沼津地方の遺墨所有者の皆様のご協力が一方ならぬものでありました。貴重な墨蹟を快く貸して下さい、心より感謝申し上げます。又、玄峰老師に関する事を会期前、会期中を通じて、多くの方々から教えを受けました。皆様にお礼申し上げます。(福田淑子)

■行事報告■

8月から12月までの5ヵ月に開催した講座は、映画教室まで含めると延べ17日間、8講座に及びます。月に1.6回のペースで講座が行なわれています。しかし、その割には郷土館の講座そのものがまだよく知られていないようです。多くの人達に知ってもらい、そして参加してもらえような講座作りに努力したいと思っています。

全ての講座についての報告は紙面の都合もあり出来ませんので、郷土館の代表的な講座「お飾り作り」について報告します。

体験講座(おかざり作り)

12月5日(日)に、郷土館会議室を会場に開いた。18名の受講者は芹沢貫一講師の指導のもとに一日慣れぬ縄ないに挑戦し、見事に「しめなわ」を完成させた。受講者にとって、たとえ「しめ飾り売り」から買い求める品より出来はよくなくても、自分の手で作りあげた「しめなわ」を新しい年の始めに飾れることに大きな喜びを感じることであろう。

この古くから伝わる年中行事のひとつを体験することから、祖先の知恵や思想を多少なりとも理解し、後世に伝えていただけたなら幸いである。

本講座に関連し年中行事としての正月としめなわについて、以下に記してみたい。

(年中行事)

年中行事とは一年のうちで毎年定期的に行なわれる恒例の行事や礼式をいう。それは一軒一軒の家だけで行なわれるものもあるし、ある地域だけあるいは全国的な広がりを持つものもある。

正月を迎えるに当って、門松を立てたりしめなわを飾ったりするのはある特別な地域を除いてほぼ全国的な行事となっている。

(正月)

正月はなぜ寒い冬の最中におかれたのだろうか。年が改まり人々の気持を新たにする祝いなら、もっと気候のよい時にやったほうが良い。旧暦となってしまったが、日本の暦では立春を正月の日安としており、新暦より約40日遅れである。立春はどこことなく春のけはいが感じられる。

正月とはトシ神さまのやってこられる時である。トシとは米のことで、トシ神さまは米作りの神さまである。つまりは稲の豊作を保証してくれる神である。もしもトシ神さまがこなければ、その年

の収穫のめどは立たず生きてゆくことはできなくなってしまう。

(先祖まつり)

先祖のまつりは、日本人の生活に大きな位置を占めている。日本の宗教では直接間接に先祖崇拜に関係している。氏神信仰はその典型であろう。先祖まつりの対象は一般に先祖代々の霊である。しかし、この中には通常、没後まだ日が浅く個人として供養を受けている霊は含まれない。一定の年月を経過して清まった先祖たちの「くみたま」を祖霊と呼んでいるのである。

みたま祭りの代表的な機会である盆になると、昔ながらの祖霊の送迎がなされる。三島の白滝公園で7月15、16日の2日間行なわれる“水まつり”の灯笼流しは当地方の盆行事の代表的なものである。各家々でも先祖を家に迎える(迎え火)、もとの場所に送り返す(送り火)が門口で焚かれる。

正月行事が半年をへだてて盆と向い合う先祖のみたま祭りであるということは、現在ほぼ定説となっている。正月に家々を訪れる祖霊は、年神・歳徳神・正月さま・トシ神さまなどとよばれ、新しい年を祝福する神であると同時に前述したように穀物の豊作をもたらす農耕神ともされてきた。

(しめなわ)

しめなわというのは、内外の境界や出入の禁止などを、しるしに引きわたすシクメナワのことであり、正月には門戸に張りめぐらし、禍鬼の内にはいられないようにとのこころをあらわすのにもちいられた。(図説 日本民俗学全集)

都会では、松などと一緒に年の市で買うようになってきたが、地方ではまだ一家の主人が自分の手で暮の26日にシメナワのない日としてなうことが多い。千葉県安房郡では、年越しの夜ふけてから年男の主人がなうという。

たとえ門松を立てない地方でもシメナワを張る所は多い。シメナワは地方によってさまざまな形があり一文字・輪ジメ・牛蒡ジメなどと呼ばれている。

シメナワは茅の輪の一種で、茅の輪の起源はスサノオノミコトの神話の中に、これを身に帯びておれば、疫を避けることができるということからおこっているといわれている。(稲木久男)



■展示資料紹介■

秋山富南と豆州志稿

江戸寛政期は日本の地理学の一つの頂点であった。頻繁になってきた外国船来航を背景に、寛政5年老中松平定信の伊豆巡視があり、寛政13年には伊能忠敬が大日本沿岸海輿地全図作製にとりかかる。安定した領国支配を望む幕府の要望もあり、各地ですぐれた地誌が誕生していた。その一つ「五畿内志」を編纂した並河誠所は、後に三島に私塾を開くが、秋山富南はこの誠所の影響を強く受けたといわれている。

秋山富南は享保8年(1723)中郷村安久(現三島市)の名主の家に誕生する。幼くして両親を失い、病弱であったため、役人になることをあきらめて早くから学問の道を志したという。14~16歳にかけて並河誠所の教えを受け、叔父が白隠禅師と親交があった関係で、禅師の影響も受けたようである。長じて学問の才を表わし、近郷の者に詩歌・儒学を教えた。富南の名声は甲斐・相模にまで聞こえ、遠来より富南の下に集まる者が多かった。

常々、伊豆を記す満足な地誌がない事を残念に

思っていた富南は寛政元年(1789)、「豆州志稿」編纂に着手した。時に67歳であった。

時の葦山代官江川英毅は、村落通行の便宜を図るなど協力を惜しまなかった。資料収集のために伊豆の山野を隅々まで、歩きまわる事10余年、多額の出費で、秋山家は疲弊し、高齢の富南にとっても楽な旅ではなかったであろう。

寛政12年(1800)3月「豆州志稿」13巻が完成、幕府に献上し、賞詞銀10枚を下賜される。内容は①、建置、疆域、形勝、沿革、租庸調、荘園、武家役、里程、郡郷、祥異、雑事②③町村④山嶽⑤原野⑥川湊、橋梁⑦物産⑧⑨神祠⑩⑪仏刹⑫墳墓⑬流寓、人物、烈女、僧英、俠客となっている。又、伊豆の地図を添えている。

村落支配、海防問題の上からも詳細な調査に基づく地誌が望まれていた折でもあり、時宜を得たものであった。

明治年間に田方郡小坂の国学者萩原正平・正夫父子が「豆州志稿」を増訂出版し、この名著は一層普及して、伊豆地誌のバイブルとなった。

(福田淑子)

■収集資料紹介■

採集日	提供者	住所	資料	点数
57. 5. 6	河野昇氏	市内若松町4350	トオミ(唐箕)	1
"	"	"	シロナラシ	1
57. 5. 24	佐竹恭一氏	市内旭ヶ丘16-18	季王家別邸絵図	1
"	"	"	文書	1
57. 6. 16	佐藤ふみ子氏	市内中84の7	鉄びん	1
"	小川光俊氏	市内中央町	鍵	32
"	"	"	錠	1
57. 7. 29	武川喜八氏	大仁町浮橋土沢1599-2	鏡台	1
57. 9. 17	川口氏	市内加屋町	三島町誌(全)	1冊
"	"	"	世界画報	20冊
"	"	"	躍進之日本	12冊
"	"	"	日露戦争実記(写真画報)	22冊

尚、今回掲載予定の収集資料には、花鳥兵右衛門関係のものがありました。余りにも多くの資

料であり、現在整理途中です。整理ができ次第、まとめて御報告したいと考えています。(杉村 斉)

三島古文書読習会の生い立ち

昭和48年2月3日、三島市郷土館において第1回古文書入門講座が発会され当時の県立教育研修所教授四方一瀧先生の御指導を頂きました。

其後当時の長谷川館長の発起により三島に郷土史研究を含めての「三島古文書読習会」が発足しました。当時の会員数は21名で毎月第二第四の土曜日に郷土館の会議室を教室として勉強に励みました。以来会員も逐次増加し教室内の勉強のみならず近在の旧家名刹をお訪ねして古文書を研究し又著名な講師をお招きしての講習会の開催等積極的な活動を続けて参りました。

歴史研究のための素材は遺跡遺物伝承などさまざまありますが文書史料がもっとも重要な位置を占めております。

殊に近世古文書は古代や中世にくらべて誠に数も種類も多く、当時の庶民の社会生活を知る為にも最も大切な資料であります。

歴史の町わが三島はまだまだ幾多の貴重な古文

書が土蔵の片隅に古ごうりの中に埋もれているかも知れません。この一冊一通の古文書をコツコツと掘り起して郷土の為にも尊い歴史を解明する事が私達の使命と思っています。

古文書の世界は無限であり、そして深く厳しい道の連続であります。28名の同志は郷土館長初め職員各位の指導のもとに一層の情熱を傾け取組んでいきたいと努力しています。(相原弘尚)



楽しく学習する会員の皆さん

★★★★★ おしらせ ★★★★★

■刊行物案内■

- テーマ展図録「山本玄峰老師」(頒価) 500円
好評のため発売後まもなく売切れてしまい、皆様に大変ご迷惑をおかけいたしました。その後増刷をして郷土館窓口にて発売しておりますので、ご希望の方はお早くとお求め下さい。
- 三島小誌(四)「戦国の争乱」(頒価) 700円
- 三島小誌(別冊)「ふるさと探訪」(頒価) 500円
- 三島の昔話……………(頒価) 500円

■編集後記■

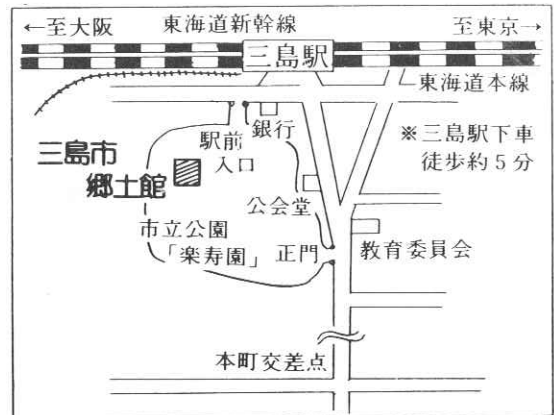
昭和58年の新春を迎え、心よりお慶び申し上げます。

1月発行号として、色々の異称を調べてみました。正月(陰暦で第1の月のこと)睦月(実月の義、稲の実をはじめて水に浸す月のこと)13月(12月のつぎの月)元月(はじめての月)太郎月(長男の月)王月(第1の月の意)泰月(泰初一天地ひらけはじめ)端月(端ははじめての意)大簇(孟春の月、すなわち正月)等々。

数多いのに驚きましたが、私達の周辺にも真贋が過ぎる位にあります。本年こそは真物のみを選択する目を養いたいと思います。今年も郷土館をよろしく願い致します。(稲木)

利用案内

- 休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
- 開館時間 午前9時～午後4時30分
- 入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.14

昭和58年1月1日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL.0559-71-8228
発行 三島市教育委員会